

仏塔に関わった出家者

井 上 陽

出家者が、在家信者の死者儀礼や祖先崇拜に関わることを述べる文献資料はない¹⁾が、少なからず碑銘資料からそれを窺わせるものがある。仏塔信仰には、先祖供養の一面があった²⁾し、仏塔には、早くから出家者も関心を寄せていた。それなら、出家者は在家信者の民間信仰的な儀礼や崇拜とどの様に関わっていたのだろうか。本稿はこのことについて論じるものである。

仏塔と先祖供養のつながりをはっきり示すものとして、紀元前 1 世紀のシンコット出土舍利容器銘文がある。

この舍利は破壊されていて、尊敬されていない。それ(舍利)に対する季節の供物は衰微し、誰も信仰と供物と水を先祖 (*pitr[r]i*) に供養していない。… [塚本 Shinkot 2.]

注目するのは、舍利を供養していないことが、先祖を供養していないことを示していることである。また、Azes63 年 (6 C.E.) の年付をもつ Bajaur 地方出土舍利容器銘文では、Indravarma が親族と共に釈尊の舍利を奉安したことが「[逝去せる] 先祖の供養 (*pidua puyae* skt. *pitṛ-pūjā*) のために」なることを刻している [塚本 Bajaur 1.]。これら以外にも、西北インドから発見されている舍利容器銘文には、釈尊の舍利の奉安が、一切諸仏の供養等、父母の供養になると刻され、それが死者かどうか解らないが、父母の供養と仏への供養が同等のものであることを示している。これらには出家者の名は出てこないが、明かに、仏塔信仰と先祖供養及びそれを含む祖霊信仰と関係があることを示している。

仏塔に出家者が関わることについて言えば、最古層に属するパールフットからは、仏塔の欄楯柱に出家者の名を刻している³⁾。これらの出家者の中には、諷誦者 (*bhānaka*)、[三] 蔵の精通者 (*peṭakin*)、五部の精通者 (*pa[m]canekāyika*)、経の精通者 (*sutaṃtika*) と呼ばれる出家者がいることに注意を引く。これらは、職能的役割をもった出家者が仏塔への寄進という形での関わり方であるが、仏塔及びその付属物の建立という形での出家者の関わり方もある。

紀元前 2 世紀のサータヴァーハナ朝治下、西インドのカーネリー窟院銘文は、

在家信者の寄進した窟院が、寄進者たちの肉親の供養、一族に最高の〔功德の〕配分（*aga-paṭasā*）にならんことを祈願し、一切衆生の利益・安樂のためになることも祈願している。さらにこの窟院は出家者によって建立されたことを刻している。

…ここに造営監督者（*navakamika*）・出家者である諸長老の大徳 *acala* 大徳 *Gahala* (*Gṛhala*)、大徳 *Vijayamita* (*Vijayamitra*)、大徳 *Bodhika*、大徳 *Dhamapāla* (*Dharmapāla*)、…監督者である *Bodhika*、たちによってなされた。 [塚本 Kanheri 5.]

上記銘文にててくる造営監督（*navakamika* skt. *navakarmika*）は、おもに僧院や仏塔の建立を職能的役割とする出家者で、広く律文献にも窺える⁴⁾ものである。ここでは、一族への配分が死者に対してのものなのか解らないが、窟院建立の功德が他者に振り向けられることを示している。また、この様な民間信仰的な側面に直接、出家者が儀礼に関わることは刻されていないが、窟院の建立という形で在家信者の信仰と関わっていたと考えられるのである。

紀元後3世紀のナーガールジュナコーンダ大塔出土アーヤカ柱銘文には、寄進者の功德が死者のみならず、未来や現在の人々に廻向し、自らは涅槃を得ることが刻されている [塚本 *Nāgārjunakoṇḍa* 1-9, 11, 14-16.]。さらに、大塔の建立が出家者によってなされたことも刻している。

…長部・中部經典の受持者（*dīgha-majjhima-nikāyadhara*）である大徳 *Ānada* (*Ānanda*) によってこの大塔の造営が完成せしめられた。そして柱が建立せしめられた。…

[塚本 *Nāgārjunakoṇḍa* 6, 14.]

これら、アーヤカ柱銘文に刻される布施者自身の行為が出世間の果報を導くものであるが、廻向される対象の得るものが、出世間の果報なのか世間の果報なのか明かでない。ただ、布施の功德が涅槃を導く善根と考えられていることは、明かに出世間の内容であり、そこに長部・中部經典の受持者である出家者が関わったということは、世間から出世間への昇華に関与したと考えられるのである。

これまで、仏塔と民間信仰的内容に関わる出家者についてみてきた。それらは、儀礼等の行為に直接関わるものではなく、仏塔への寄進及び建立という関わり方であった。そこには、いくつかの出家者の職能的役割があり、*Milinda-paṇḥa* には以下のように述べられている。

「尊者ナーガセーナよ、何を仏陀世尊のパズールというのか」と。「大王よ、世尊の九分の仏語、諸々の舍利・諸々の聖遺物・諸々の祠堂、僧宝をパズールとする。大王よ、パズールにおいて世尊により、生成成就が差出され、財成就が差出され、寿成就が差出され、無病成就が差出され、美貌成就が差出され、智慧成就が差出され、人成就が差出され、天成就

が差出され、涅槃成就が差出されている。そこで、それぞれの成就を欲する諸々の人たちは業の代金を払って、所望の成就を買う。ある者は戒の受持によって〔諸々の成就を〕買う。ある者は布薩行によって〔諸々の成就を〕買うのである。〔それは〕たとい少量の業の代金によっても希望の諸々の成就を得るのである。…」…「大王よ、世尊の法の街において、次のような人々が住んでいる。諷誦者・持律者・論者・説法者・ジャータカ誦者・長〔部〕誦者・相應〔部〕誦者・増支〔部〕誦者・小〔部〕誦者…、〔それらは〕あたかも葦の林のように、法の街に住んでいた。

[*Milinda-paṇḥo* (PTS) V. Trenckner ed. (London:1986) 341-342.]

ここで興味を引くのが、在家信者は、業の代金 (*kammamūla*)・戒の受持・布薩によって生成就乃至涅槃成就の果報も得ることができるということである。言い換えれば、これら専門的役割を持った出家者は、在家信者の果報に応じてその役割を担っているということである。また、ここに述べられる仏陀世尊のバザールには、諸々の舍利・諸々の聖遺物・諸々の祠堂というように諸々のストゥーパを指している。そのストゥーパをもとに、出家者は在家信者の功德の成就に関与していたと考えることはできないだろうか。

以上、祖先崇拝に関係がある仏塔に、出家者は、寄進及び建立という形で関わったこと、その出家者には職能的役割を担った出家者がいたこと、さらに、これらの出家者は在家信者の功德の成就に関与していたことを述べた。これらを考え合わせると、死者儀礼や祖先崇拝を司祭することを直接言及する資料はないものの、仏塔に関わる出家者は、祖先崇拝等の在家信者の信仰と向き合っており、その関係を持っていたと考えられるのである。

-
- 1) 奈良康明 “原始仏教における功德観念の発展と受容—文化史研究の立場から—,” 日本仏教学会年報 #59 (1994) 1-15. 2) 入澤崇 “廻向の源流,” 西南アジア研究 #30 (1989) 1-20. 3) 静谷正雄 初期大乘仏教の成立過程 (Kyoto:1974) 14-29. 参照.
4) Njammanisch, M. “Der *navakarmika* und seine stellung in der Hierarchie der Buddhistischen,” *Altorientalische Forschungen* #1 (1974) 279-293. また、拙稿 “*navakarmika* と呼ばれた出家者,” 印度学仏教学研究 #47-2 (1999) 167-169. 参照.
塚本: 塚本啓祥 インド仏教碑銘の研究 I (Kyoto: 1996)

〈キーワード〉 仏塔信仰, 出家者の職能性, 祖先崇拝, 死者儀礼

(龍谷大学大学院)